



【プレスリリース】

報道関係各位

2021年6月28日

全国初、低侵襲で輸血不要の手術体制『プレビアセンター』を正式提供

“救命医兼産婦人科医”が確立した単科によるハイブリッド手術が本格始動

拝啓 ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部神奈川県済生会横浜市東部病院（神奈川県横浜市鶴見区、以下、当院）は、分娩時あるいは分娩後の 出血性合併症のハイリスク因子（癒着胎盤や前置胎盤）症例において、ハイブリッド手術で対応する新しい手術体制『プレビアセンター（Previa=前置胎盤）』を2019年5月に導入し2年が経過した現在、有効性と安全性を検証でき手術戦略の進化も遂げ、確立された医療としてご提供できるに至りました。

出産時に普通分娩（経膈分娩）が難しいと判断された際に選択されるのが帝王切開ですが、その帝王切開による分娩が年々増加しており、2016年調査で5人に1人だった割合が2018年調査では4人に1人が帝王切開で出産をしています。通常、帝王切開分娩を行う場合には出血量が通常分娩よりも多くなりやすく、特に胎盤が赤ちゃんよりも子宮の出口側にある「前置胎盤」では大量出血になるリスクが高いため、帝王切開時にはお腹を縦に切開し、時にはさらに大きく開けて子宮底部（子宮の出口の反対側の筋肉の厚い部分）を切開したり、止血困難時は子宮摘出したりと、母体への負担は更に大きくなります。前置胎盤や癒着胎盤は、産後出血とともに、危機的出血により母体が生命の危機に直面しえる「ハイリスク分娩」とされ、対策の議論はいまなお国内外で絶えません。その前置胎盤・癒着胎盤発生件数は、不妊治療の普及や妊娠年齢の高齢化に伴い、増加傾向にあります。

そこで当院では高画質な透視・血管撮影・血管内治療を行うことができる「ハイブリッド手術室」において大量出血ハイリスクの前置胎盤・癒着胎盤において帝王切開と同時に血管内処置を施す『ハイブリッド帝王切開術』という戦略とその体制を確立し、『プレビアセンター』として医療を提供しております。プレビアセンターでのハイブリッド帝王切開術は、通常であれば何リットルも出血するような状態でも数100ccの出血量に留めて輸血不要となります。手術当日も、術後のICU管理など要さず一般の産科病棟で母児同室ができ、翌日には歩行も可能となり、一般的な帝王切開患者と同様の横切開の創で、同等の経過で退院を実現する、産婦人科医単独では全国に類を見ない術式です。

当院では、ハイブリッド手術による低侵襲で安全な治療の提供と、周産期に係わる医療者にも受け入れやすいプロトコルの組み合わせにより妊産婦本人や家族にとっても医療者にとっても、双方に不安も負担も大きいハイリスク妊娠・分娩を、安心・安全なお産として届けて参りたいと存じます。

敬具

<本件についてのお問い合わせ先>

済生会横浜市東部病院 広報推進室 担当：今野・荒木

〒230-8765 神奈川県横浜市鶴見区下末吉3丁目6番地1号

電話：045-576-3000 Email:koho@tobu.saiseikai.or.jp

**【東部病院の「ハイブリッド手術室」とは？】**

手術室と血管撮影室を統合したものです。基本は手術室であり、高い清潔基準を満たし、麻酔器やモニター類等の手術に必要な機器を常備しています。その設備に、血管内治療用の高画質な透視・血管撮影装置を組み込むことで、手術のみでは到達困難な部位に対するカテーテル治療の併用、カテーテルのみでは治療できない病変に対する手術の実施も可能となります。外科的手術やカテーテル治療それぞれの長所を組み合わせ、弱点を補い合うことで、より高度かつ高品質の医療が可能になるメリットがあります。具体的には、大血管や心臓弁膜症、脳血管の手術の一部を行っております。当院ではこのハイブリッド手術室を用いたハイブリッド手術を行うことで、患者さんにより低侵襲で効果的かつ安全な治療の提供を目指しております。

**【ハイリスクな「前置胎盤」分娩とは？】**

胎盤が正常より低い位置（膣に近い側）に付着してしまい、そのために胎盤が子宮の出口（内子宮口）の一部もしくは全部を覆っている状態を「前置胎盤」といいます。全分娩のおおよそ0.5%前後といわれています。通常、経膣分娩（下からの出産）では赤ちゃん→胎盤の順に出てきますが、前置胎盤では、胎盤が赤ちゃんよりも下（膣）側にあります。胎盤が出口を覆っているため物理的に赤ちゃんは産道を通る事が出来ません。また、陣痛発来などで子宮の出口が広がり始めると胎盤から大出血を起こす事があります。その為、前置胎盤の場合には帝王切開での分娩となります。

【「プレビアセンター」を確立した折田智彦より】

私は危機的出血を生じた危険な状態の妊産婦さんに対して血管塞栓術による緊急止血と集中治療で救命するという形で関わってきました。その救命の現場で、幸せなはずの赤ちゃんの誕生が一転して「ママ」という大切な家族を失うかもしれないシーンに激変する様を見てきました。そのような想いをする妊産婦さんやご家族を一人でも減らしたい、救いたいと強く思いましたが、救命医の立場での声を産科医に届けることは簡単ではありませんでした。「救命医には見えていない産科・周産期特有の理由があるのかもしれない。自身が産科・周産期医療を1から学び、産科医の視点やスキルを共有できるようになれば、声が届くかも。自身の救命医療の幅も広げて、より良い産科医療・救命医療を提供していきたい。産科医と対等に話せる救命医を目指そう」と決意し、一念発起して研修医として入門しました。

救命医として磨いてきたスキルや開発してきたデバイスを用いて、大量出血の恐怖や大量輸血、子宮摘出、大きな手術痕などのリスクから、世の中の妊産婦さんやその家族を解放したい、と考えております。大量出血発症後の対応だけでなく、その発症阻止をする事も、救命救急医として大事な役目だとも考えております。



済生会横浜市東部病院

産婦人科 シニアレジデント

救命救急センター 元医長

折田 智彦(おりた ともひこ)

大分医科大 1998 年卒

専門分野: 救命医療、集中治療、血管内

治療(IVR)、心肺蘇生、循環器救急、重

症外傷、産科婦人科一般

学会専門医・認定医: 日本産科婦人科学

会産婦人科専攻医/日本救急医学会専

門医/日本IVR学会専門医/日本脈管学

会専門医・指導医/日本蘇生学会指導医